

論文の和文要旨

論文題目

中国少数民族口頭伝承の研究

氏名

黒澤直道

本論文は、雲南省西北部と四川省南西部に居住するナシ(納西)族の口頭伝承を対象として、ナシ語の口語と、宗教經典に見られる音声としてのナシ語を比較する方法により、ナシ族の伝統的な宗教經典をもとに形成され、近年の観光化の動きの中で大きく注目されている「トンバ(東巴)文化」の性質を明らかにしようとするものである。

これまでに中国国外で行われてきた中国少数民族の口頭伝承の研究は、現地調査に対する中国側からの制約や、それぞれの少数民族の独自の言語の存在という障壁により、少数民族の言語そのものまで遡って行われてきたものはほとんど無いのが実情であった。特に中国西南部の少数民族を対象とする研究の場合、そこで行われてきたのは、漢語や英語などに翻訳された資料を用いて、複数の民族や地域を対象とした比較研究の方法である。しかし、少数民族語の原語の資料を用いずに、翻訳された資料のみを用いてこの地域の少数民族の言語文化を研究しようとするには自ずから資料的な限界がある。しかし近年、中国国内の様々な状況の変化に伴い、たとえ外国人研究者であっても、少数民族の言語をある程度まで理解した上で、自身でフィールドワークを行い、その民族の口頭伝承に触れることができるようになってきており、これまで主として漢語に翻訳された資料を通して行われてきた中国少数民族の口頭伝承の研究には、新たな探求の可能性が生まれている。

このような変化の背景にあるのは、目下の「西部大開発」という国家的なプロジェクトの下での、急激な観光開発の動きである。雲南省では観光を目的とした対外開放が進み、1997年には全省で未開放地区が撤廃された。これは一方で研究上の利点をもたらしているが、経済戦略としての観光開発は、他方ではそれぞれの少数民族の伝統的文化の観光商品化という変容をもたらす

ており、伝統的文化の変容によってそれぞれの少数民族はこれまで伝えてきた口頭伝承文化を失いつつある。そのような中、雲南省と四川省の一部の地域に居住するナシ(納西)族においては、本来の伝統的な口頭伝承文化は喪失の段階にある一方で、それと密接に関連した特殊な宗教的伝承が、近年の観光開発と関わりながら、一種の特異な「文化」を形成しつつある。それは「トンバ(東巴)文化」と呼ばれるもので、ナシ族の宗教的な祭司である「トンバ(東巴)」が伝承してきた、独得の「象形文字」によって書かれた経典を中心とする宗教文化である。

ナシ族の宗教経典は、18世紀の後半から西欧の研究者によって注目されてきた。その中で、現在の研究に最も大きい影響を与えている研究者は、1920～1930年代にナシ族の居住地で長期にわたる現地調査を行ったジョゼフ・ロックである。ロックの残した大量の資料は、その後のナシ族研究の基盤となる大きな役割を持つ。しかし、一方でそれは必ずしも十分に整理されておらず、その圧倒的な分量と複雑さは、他の学者による検討を困難にしていることも事実である。また、ナシ族の宗教経典に関する研究は、1950年代以降の中国大陸でも行われるようになったが、そこに見られる一つの顕著な傾向は、ナシ族自身の民族のアイデンティティーとしての「トンバ文化」の研究であり、そこでは宗教経典の成立年代をはるか古代にまで引き上げようとする動きが見られる。さらに、1980年代以降の中国では、雲南省全体での急速な観光開発の中で、ナシ族地域の観光商品の目玉として「トンバ文化」が着目されていった。近年では、その「象形文字」が観光物産として中国国外にまで広まる動きを見せており、ナシ族の文化と言えばすなわち「トンバ文化」であるというような、「トンバ文化」の肥大化したイメージが形成されつつある。

本論文では、「トンバ文化」の核であるナシ族の宗教経典について、主に二つの方向から検討を行った。その第一は、ナシ族の宗教経典をめぐる外的な状況としての、その歴史的背景と社会との関係という側面からの検討である。この検討においては、ナシ族の宗教経典の成立年代の確定における問題と、ナシ族社会において伝統的な文字が使用された範囲について、筆者の現地調査での観察を交えて考察した。その結果、ナシ族の宗教経典はその成立年代を確定する証拠が十分でないことが確認された。ナシ族の宗教経典は、17世紀に書かれたとされる最も古い経典についても、その年代の解釈には曖昧性が残り、ましてそれ以前に経典が書かれたという証拠は無いに等しい。また、ナシ族の伝統的な文字の使用には、宗教的な祭司による特権性が見られることも理解された。ナシ族の社会における伝統的な文字が使用された範囲は、基本的には宗教的祭司であるトンバの宗教活動を中心としたものであり、その文字の使用がナシ族の一般の人々にまで広まっていたとは考えにくい。トンバ以外の人々によって使われたケースもある程度は存在するが、その多くはトンバからの影響を受けたものと考えられる。本来、ナシ族の宗教経典の習得

には、相当な修練が必要とされるものなのであり、誰もが簡単に經典を読みこなせるようになっては宗教としての体面が保てないのである。ナシ族の文字の歴史においては、經典の中の一部には「象形文字」を表音的に使用する合理的な方法が見られ、また、一部の地域ではナシ語の音節に正確に対応する表音文字が使われたこともあるが、結局それが主となることはなかった。これは、宗教經典と文字の特権性が、ナシ族の文字の歴史に見られる改革への志向を挫折させ、文字としての大衆化を妨げたためと考えられる。

本論文で行った第二の方向からの検討は、ナシ族の宗教經典の言語的な側面に対する検討である。これまでナシ族の宗教經典は、その特徴的な「象形文字」によって注目されることが多く、その音声言語の側面については十分な検討がなされておらず、特にナシ語の口語との関係についての考察はあまりに不十分であった。そこで本論文では、ナシ族の宗教經典の音声の側面に着目し、筆者が現地調査で採集したナシ語の口語資料を用いて、宗教經典の音声言語と、ナシ語の口語やナシ族の民謡などの口頭伝承資料との比較を行った。この第二の方向からの検討によって明らかになったことは、ナシ族の宗教經典の音声言語は、「ナシ族口頭伝承」という概念の中の一構成要素として考えるのが適当であるということである。これまで、ナシ族の宗教經典はその特徴的な文字によって強く印象付けられてきたため、非常に特殊な伝承形態として考えられてきたが、その文字テキストは別として、經典の音声言語としての側面をナシ語の口語やナシ族の民謡と比較すると、それぞれが相互に形式や言語的特徴を変換した関係を持っていることが理解できる。ナシ語の口語のテキストに、韻文的な形式性を加えたものが民謡のテキストに当たり、さらにこの民謡のテキストに、特殊な語彙や文法的特徴を加えたものが宗教經典の音声言語のテキストに当たると考えられるのである。従って、ナシ族宗教經典の音声言語は、ナシ語の口語やナシ族の民謡などを包括した「ナシ族口頭伝承」という概念の中の、一構成要素として考えるのが適当なのである。

以上の二つの方向からの検討を踏まえて、もう一度ナシ族の「トンバ文化」を見直すと、次のような理解を得ることができる。トンバによって伝承されるトンバ教や、ナシ族宗教經典に見られる特殊な文化を「トンバ文化」とし、トンバ以外のナシ族の一般の人々が伝承する、口語としてのナシ語や、生活習慣、行動様式などを含む、日常的で一般的な文化を「ナシ文化」と呼ぶことにすれば、ナシ族の宗教經典や伝統的な文字に見られた特権性は、「トンバ文化」を「ナシ文化」から引き離す動きであると理解することができる。また、近年の観光開発における「トンバ文化」の観光商品化の状況においては、その特殊な「象形文字」としての側面ばかりに注目が集まり、ナシ語の音声言語としての側面は忘却されている。場合によっては、そこではナシ族の

日常的な文化さえも忘却されている傾向が見られ、その結果、「トンバ文化」の肥大化したイメージが、ナシ族の現状との間に食い違いを見せている。

しかし本来、トンバ経典の音声言語は、口語や民謡などをその中に包括するナシ族の口頭伝承世界の一構成要素として捉えることができるものである。従って、「トンバ文化」とナシ族の現状との食い違いという問題が生じてきた現在においては、「ナシ族口頭伝承世界におけるナシ族宗教経典」という位置付けによる、宗教経典研究の再構築が求められる。そこで必要とされるのは、本論文で行った方法に見られるような、文字よりも音声言語を重視する考え方である。その上で、ナシ族宗教経典を核として生まれ、現在ではナシ族の文化そのものと言えるほどにまで肥大化してしまった「トンバ文化」の突出した位置付けを見直し、ナシ族の様々な文化要素を包括する「ナシ文化」という上位概念の中に含まれる下位概念として、「トンバ文化」を位置付け直すことが必要であると考えられる。このような「ナシ文化の中のトンバ文化」という捉え方は、現在の民族の実像とかけ離れた虚像としての「トンバ文化」を見直すことにつながる。

ごく近年になって、ナシ族居住地域の一部の小学校では、ナシ語のローマ字表記による教科書を用いて子供たちにナシ語を教える授業が試みられている。この動きは、近年強まってきたナシ語の喪失という危機感によってナシ族自身から出てきた動きであるが、これは見方を変えれば、ナシ族の口頭伝承世界から引き離されていった「トンバ文化」の世界から、再び口語のナシ語の世界へと立ち返る動きとも言えるものである。